

## 海外主要都市における日本語人の言語行動

平高史也（総合政策学部）

### プロジェクトメンバー

岩本綾（慶應義塾大学）・王雪萍（東京大学）・木村護郎クリストフ（上智大学）  
島田徳子（武蔵野大学）・平高史也（代表・慶應義塾大学）・福田えり（慶應義塾大学）  
福田牧子（バルセロナ自治大学）・古谷知之（慶應義塾大学）

### 1. 研究の経緯

2011 年度に発足した「海外主要都市における日本語人の言語行動」プロジェクトも 3 年目を迎えた。2013 年度は、基本的には昨年度までの調査を継続し、成果を発表していくことに重点を置いた。

### 2. 2013 年度の主な活動

今年度の主な活動は次のとおりである。

- 1) 2012 年度までに調査を実施したデュッセルドルフ、バルセロナ、マドリッド、上海の協力者に対する報告書の執筆。いずれも本プロジェクトのサイト「海外在住日本人の言語生活」 (<http://gengoshiyou.blogspot.jp/>) に掲載済み。
- 2) これまでに他の都市で使用した質問紙を用いて、ソウルで質問紙調査を実施。150 件の回答を得た。
- 3) 質問紙調査を行った上海での回答者の協力を得てインタビュー調査を開始。質問紙調査による量的調査では明らかにできなかった問題の解明に取り組んでいる。
- 4) 成果の発表：論文投稿（慶應義塾大学外国語教育研究センター紀要第 10 号 2014 年 3 月 31 日発行予定）、研究会発表（慶應義塾大学外国語教育研究センター科研費グループ発表会 2014 年 1 月 19 日）、学会発表（社会言語科学会 2014 年 3 月 15 日）

### 3. これまでの研究の概要

#### 1) 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、在留邦人が多く、日本の外国語教育で現地語の学習者数が多い非英語圏の主要都市における日本語母語話者の言語生活に関する調査研究である。本プロジェクトの目的は、海外における日本語母語話者の言語生活の一端を明らかにし、研究成果を日本における外国語教育の政策やカリキュラム・教材等の作成、企業の海外戦略（事前研修等）に反映させることにある。調査対象地は上海、ソウル、デュッセルドルフ、マドリッド、バルセロナで、いずれの都市でも質問紙調査は終わり、ソ

ウルを除く 4 都市では分析も終わり、報告書を作成した。上海では、回答者の一部にスカイプを使って、インタビュー調査を行っている。

## 2) これまでの研究

### 2011 年度

パイロット調査：海外滞在経験者へのインタビュー、質問紙作成  
講演会・研究会開催

### 2012 年度

質問紙調査実施（デュッセルドルフ、上海）と分析、調査報告（デュッセルドルフ）  
海外学会発表、シンポジウム開催

### 2013 年度

質問紙調査実施（マドリッド（+バルセロナ）、ソウル）と分析  
調査報告（上海、マドリッド（+バルセロナ））、論文執筆、学会発表

### 2014 年度

海外学会発表  
質問紙調査（WEBと紙媒体、計 54 問）（有効回答数／配布数）  
デュッセルドルフ：247／408（日本人学校の協力）  
上海：325（調査会社に委託）、マドリッド：36／48、バルセロナ：18／35  
ソウル：150（調査会社に委託）  
ソウル以外は分析を終え、報告書を作成、ブログに掲載。

## 4. 2013 年度の研究成果：デュッセルドルフと上海の分析結果から

### ○回答者の属性

項目		デュッセル ドルフ	上海
性別	男	122	134
	女	125	191
年齢	20代	3	41
	30代	94	157
	40代	138	97
	50代以上	12	30
滞在期間	1年未満	54	62
	1-3年未満	100	136
	3-5年未満	58	54
	5年以上	35	73
仕事	している	129	198
	していない	118	127
滞在目的	仕事のため	123	175
	研究・勉強のため	2	6
	研修のため	0	2
	配偶者の仕事や研修のため	117	127
	国際結婚のため	5	14

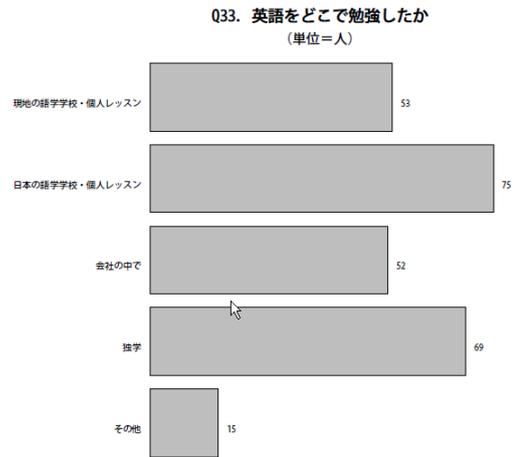
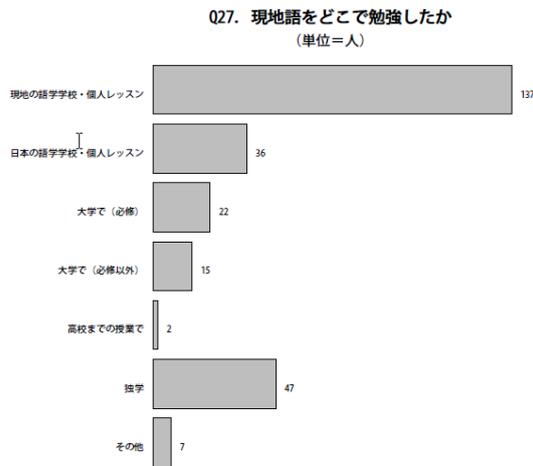
デュッセルドルフ調査では、現地の日本人学校の協力を全面的に得たので、その影響が現れることを考慮しなくてはならない。

一方、上海では仕事をしている人は 6 割で、86%が日系企業に所属している。業種は製造業が多い。約 6 割が日本から海外赴任しているが、現地採用者も 34%いる。また、約 9 割がフルタイム雇用（週 30 時間以上の労働）である。管理職も 38%と多い。

配偶者の仕事の都合で上海に住む人は 127 名で、そのうち主婦専業は 121 名、女性は 116 名である。主な年齢層は 30～40 代、滞在期間は 3 年未満が 7 割強、子どもを帯同する人が約 8 割であった。

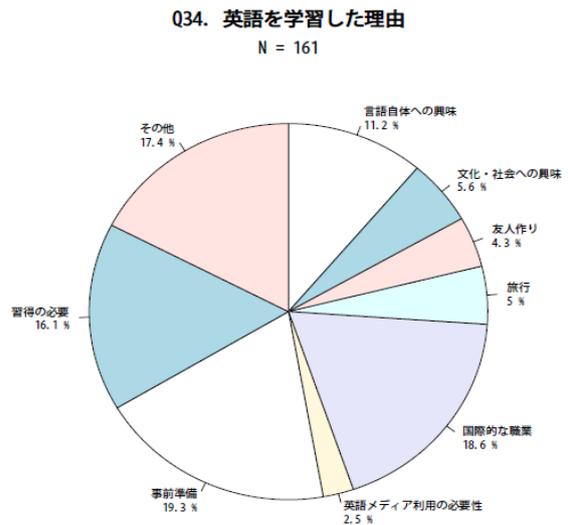
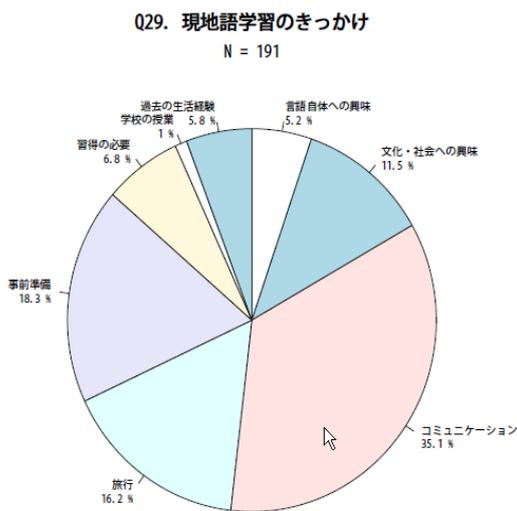
#### 4. 1. デュッセルドルフ

- 自己評価によるドイツ語 (D) と英語 (E) の能力 : D=1,89 E 3,32  
(4 技能を「とてもできる : 5、できる : 4、まあまあできる : 3、あまりできない : 2、全くできない : 1」の 5 段階で得点化)  
デュッセルドルフでは、英語の能力の方がドイツ語能力よりも高く評価されている。
- DとEを (さらに) 学習した場所



ドイツ語は現地の語学学校や個人レッスンで学んだ人が多いのに対して、英語は日本の語学学校や個人レッスン、独学で学んだ人が多くなっている。

- DとEの学習動機

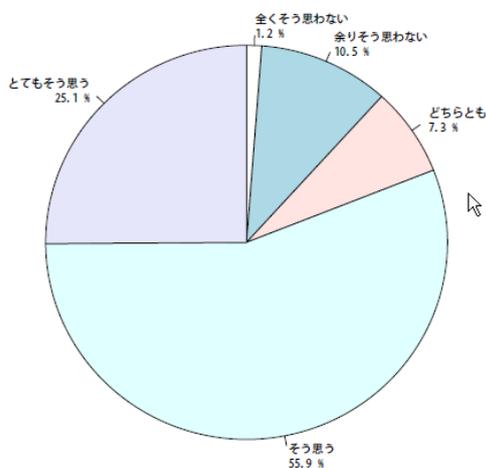


国際的な仕事での必要性では英語を、現地でのコミュニケーションのためにはドイツ語を学習するという姿勢が垣間見える。

○DとEの必要性

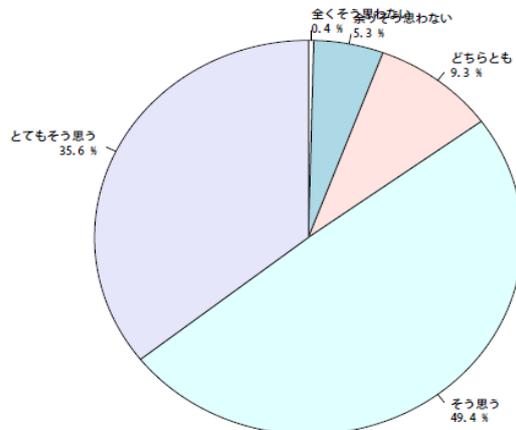
Q25. 現地語は必要か

N = 247



Q31. 現地での生活に英語は必要か

N = 247



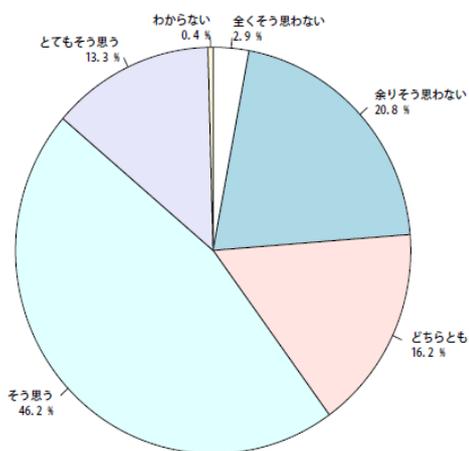
「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると、D (81.0%) < E (85.0%) となり、英語の必要性がやや優っている。「全くそう思わない」と「余りそう思わない」を足しても、D (11.7%) > E (5.7%) となり、やはり英語の必要性が上回っている。デュッセルドルフでは、大人は英語の必要性をより強く感じているようである。

○子供にとってのDとEの必要性

「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると、D (59.5%) > E (49.0%) となり、子どもにとってはドイツ語の方が必要だと思う人の割合が上回る。また、「全くそう思わない」と「余りそう思わない」を足しても、D (23.7%) < E (30.7%) となり、英語を必要だと思わない人の率が上回っている。自分では英語ができて、英語が必要だと思っているが、子どもにはドイツ語もできるようにしてほしいという親の願望の現れだろうか。

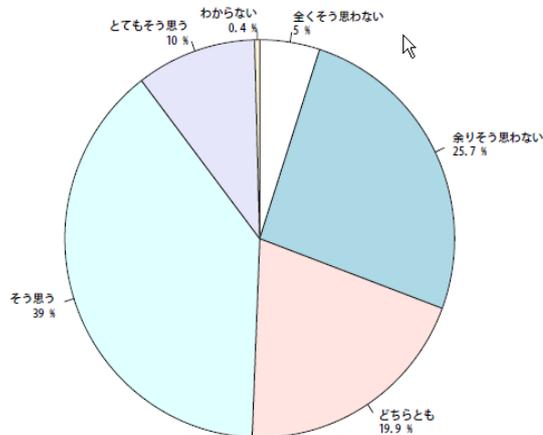
Q22. 子どもに現地語は必要か

N = 240



Q23. 子どもに英語は必要か

N = 241



#### ○個人属性と言語能力

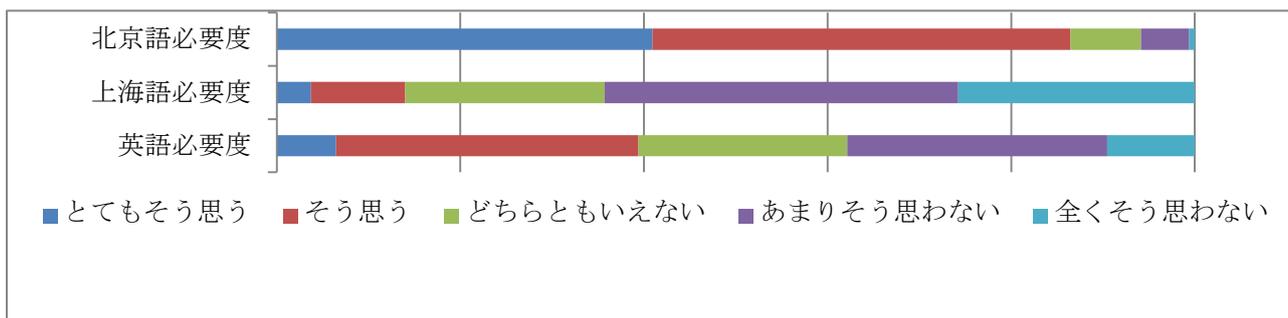
ドイツ語の能力では女性のほうが男性よりも高くなっている。これは、長期滞在なしで定住予定の、仕事のない女性（つまりほとんどは主婦）の存在が大きいものと考えられる。一方、英語の能力では男性の方が女性よりも高くなっている。男性は仕事では英語を使うことが多く、女性は家庭や子育てなど仕事以外の領域でドイツ語を使うケースが多いという事情が想像される。

#### ○言語能力と滞在期間

ドイツ語の能力は滞在期間の長期化とともに伸びるが、英語の能力は2年目以降は伸びが鈍化するようである。

### 4. 2. 上海

#### ○中国語（CH）と英語（E）の必要性



日常生活に必要な言語について、北京語ニーズが非常に高く、86%の人が必要性を感じていた（「とてもそう思う」＋「そう思う」）。一方、英語を必要と思う人は39%に留まり、上海語のニーズはさらに低かった。

#### ○現地語について：北京語学習経験者は全体の9割、学習期間は2年未満が7割

現地の語学学校や個人レッスンで学んだ人は83%、大学や高校で学んだことがある人は35%であった。学習期間は2年未満が全体の7割で、5年以上は6%である。北京語の学習動機は、赴任決定後に習得の必要性を感じて学習した人が48%、仕事とは関係なく文化、言語、現地人とのコミュニケーションに興味があって学習した人が44%であった。

### 4. 3. 現地語使用率とコミュニケーション満足度

以下の表のように、CEFRにしたがって4つの生活領域で海外在住者が遭遇しそうな場面を15設定し、言語の使い分けとその際のコミュニケーション満足度を尋ねた。

領域	場面
私的領域	1. 私的なパーティー，お茶をする時 2. 休日に友達と電話で話す時 3. 趣味，スポーツ，習い事をする時
公的領域	4. 医者診断を受ける時 5. 車，鉄道，船，飛行機など公共交通機関を利用する時 6. 住民票，自動車免許など役所で手続きをする時 7. スーパーや小売店で買い物をする時 8. レストランやカフェで注文をする時
職業領域	9. 職場で定例会議に出席する時 10. 取引先の顧客に電話する時 11. 職場の受付係や掃除係と話す時 12. 休み時間に同僚と話す時 13. 仕事の付き合い上の食事会や宴会に参加する時
教育領域	14. 学校の先生と話す時 15. 子どもの級友やその親と話す時

ドイツ語使用率とコミュニケーション満足度（デュッセルドルフ）

	場面	度数	D 使用率	コミュニケーション 満足度平均値	標準偏差
公的 5	レストランやカフェで注文	246	77.2%	3.08	0.95
公的 4	スーパーで買い物する	247	77.3%	3.03	0.92
公的 2	公共交通機関を利用する	246	45.5%	3.09	0.99
公的 3	役所で手続きする	227	41.0%	2.82	1.00
職業 3	職場の受付係と話す	126	34.1%	3.49	0.99
私的 3	趣味、習い事をする	230	13.9%	4.30	0.87
公的 1	医者診断を受ける	232	8.2%	3.91	1.08
職業 5	仕事の食事会や宴会に参加	148	4.7%	3.82	0.91
職業 4	休み時間に同僚と話す	134	3.7%	3.89	0.87
職業 2	取引先と電話する	118	3.4%	3.68	0.92
職業 1	定例会議に参加する	131	1.5%	3.70	0.95

私的 1	私的なパーティーやお茶	240	1.3%	4.48	0.75
学校 2	子どもの級友と話す	244	0.8%	4.55	0.61
学校 1	学校の先生と話す	238	0.4%	4.53	0.62
私的 2	休日に友人と電話する	235	0.4%	4.57	0.61

#### 中国語使用率とコミュニケーション満足度（上海）

	場面	度数	CH 使用率	コミュニケーション 満足度平均値	標準偏差
公的5	レストランやカフェで注文	325	91%	3.48	1.09
公的4	スーパーで買い物する	325	90%	3.44	1.09
公的2	公共交通機関を利用する	324	82%	3.42	1.07
職業3	職場の受付係と話す	226	81%	3.63	1.11
公的3	役所で手続きする	217	58%	3.67	1.15
学校1	学校の先生と話す	231	36%	4.06	1.06
職業4	休み時間に同僚と話す	226	28%	4.22	0.96
私的3	趣味、習い事をする	313	20%	4.35	0.93
職業5	仕事の食事会や宴会に参加	242	24%	4.15	1.03
職業1	定例会議に参加する	220	24%	4.15	1.01
公的1	医者診察を受ける	316	16%	4.26	1.02
職業2	取引先と電話する	210	22%	4.24	0.97
学校2	子どもの級友と話す	192	11%	4.41	0.95
私的1	私的なパーティーやお茶	319	5%	4.60	0.72
私的2	休日に友人と電話する	324	5%	4.67	0.63

#### 職業領域における両都市の言語使用

4つの領域では職業領域でデュッセルドルフと上海の言語使用に顕著な違いが見られた。まず、英語については、デュッセルドルフの方が上海よりも使用率が高か高く、「定例会議に参加」（76%）、「取引先と電話」（75%）等全場面で5割を大幅に超えているのに対して、上海では全場面で英語使用率が1～6%と極端に低い。

一方、現地語は上海の方がデュッセルドルフよりも高く、「休み時間に同僚と話す」（28%）、「定例会議に参加」「仕事の食事会や宴会に参加」（いずれも24%）、「取引先と電話」（22%）などとなっているのに対して、デュッセルドルフでは「職場の受付係と話す」（34%）以外の場面では5%未満となっている。

さらに、日本語：の使用率も上海の方がデュッセルドルフよりも高く、「職場の受付係と話す」（15%）を除いた全場面ではほぼ7割以上なのに対して、デュッセルドルフでは「仕事の食事会や宴会に参加」（41%）、「休み時間に同僚と話す」（38%）、「定例会議に参加」（22%）、「取引先と電話」（21%）、「職場の受付係と話す」（7%）と低くなっている。

## 5. 考察

まず、言語の使い分けについては、デュッセルドルフでは日本語、英語の使用率が高く、ローカルスタッフがいる「職場の受付係と話す」以外の場面では現地語が低いのに対して、上海では英語が低く、日本語、現地語が高いという結果が出た。しばしば聞かれる、海外でのビジネスは英語で事足りるとするのはデュッセルドルフにはあてはまっても、上海にはあてはまらないことがわかった。デュッセルドルフでは同僚、ビジネス顧客がドイツ人だけではなく、ヨーロッパ人全般であることが多いため、英語を使う頻度が高いのであろう。また、日本人学校の関係者を対象にデータを収集したことや、日系企業の拠点が多いことなどが影響して、日本語の使用率が上がっているのかもしれない。

一方、上海では全領域で英語が低くなっている。これは、仕事における日本人と中国人の上下関係、日本企業の中国人職員や現地サービス分野のスタッフの日本語能力の高さ、日本人の中国語に対する言語意識、さらには漢字の使用などが要因となって、日本語の使用率の高さに影響しているのかもしれない。

なお、両都市とも「医師の診断」で日本語が高くなっているのは、日本語話者の医療サービスが受けられるからであろう。

使用言語とコミュニケーション満足度の関係に目を向けると、どちらの都市でも日本語使用率の高い私的場面では当然のことながらコミュニケーション満足度が高いのに対して、現地語の使用率が高い公的場面ではコミュニケーション満足度が低くなっている。つまり、公的領域で現地語が使えるほどの能力は身につけていない可能性があり、このあたりを改善するには現地語習得のための研修等の充実が必要となろう。

最後に、本プロジェクトの今後の課題として、データ分析の継続（特に分析がまだのソウルのデータ）、都市間の比較、質問紙調査を補完するインタビュー・データの収集などが考えられる。

## 参考文献

- 岩崎信彦ほか編（2003）『海外における日本人，日本のなかの外国人』昭和堂
- 岩本綾・島田徳子・古谷知之（2013）「デュッセルドルフ在住日本人の言語生活に関する調査結果から—「海外主要都市における日本語人の言語行動」プロジェクト中間報告—」，公開シンポジウム「グローバル化社会における多言語使用と外国語教育」，「海外主要都市における日本語人の言語行動」共同プロジェクト主催，2013年3月9日，於：慶應

義塾大学三田キャンパス

電通総研・日本リサーチセンター編（2008）『世界主要国価値観データブック』同友館  
福田えり・古谷知之・島田徳子・岩本綾・王雪萍・福田牧子・平高史也（印刷中）「上海  
在住の駐在員配偶者の言語生活に関する考察」『慶應義塾大学外国語教育研究センター  
紀要』第9号

福田牧子（2013）「多言語社会における日本人の言語使用ースペイン・カタルーニャ自治  
州在住の日本人のケースー」『社会言語科学』第15巻第2号 15-32

吉島茂・大橋理枝（他）訳・編（2004）『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のた  
めのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

労働政策研究・研修機構（2008）『第7回海外派遣勤務者の職業と生活に関する調査結果』  
JILPT 調査シリーズ No. 40

Aya YASUI-IWAMOTO, Eri SEKIJ-FUKUDA, Goro Christoph KIMURA, Makiko  
FUKUDA, Tomoyuki FURUTANI, Noriko SHIMADA, Xueping WANG, Fumiya  
HIRATAKA (2012) Language Behaviors of Japanese Native Speakers in  
Non-English-Speaking Cities. Sociolinguistics Symposium 19, Freie Universität  
Berlin, August 23, 2012